

坪井さんの文章の中に、日本の文部科学省かなんかが、そのような主張をしていて、大学教育現場でも、そのような主張があり、対策がとられている・・・そういう話がありました。で、工藤さんは、それに半分賛成するのだが、と。私は「それは<国語>とか<英語>といった言語の問題ではなく、一つのリテラシーを十分に獲得していることは、もう一つのリテラシーの獲得を容易にする、という主張だと思う(この主張に賛成ということではないです)」と言いました。そのことについて、あの場では、十分に議論できなかつたので、少し書きます。

1. 読み書き能力

読み書き能力(これは「リテラシー」の初期の訳語ですが)というのは、非常に規範性の高いもので、教養という概念に直結していると思います。例えば、「日本語」での読み書き能力が高い、ということは、「日本語」を共有している(ものとして想定され、そのように作られる)社会の中で、高尚で価値の高いと思われる文学作品を知っており、それについて話すことができ、同時に書き言葉のさまざまな規則(規範性)を身につけている・・・まあ、そんな風にいえるだろうと思います。書き言葉のどのようなものが正当・正統であり、どのようなものがかす(滓)なのか、基準となる価値観を身につけている、ということでもあります。日本で日本の学校に行った人の多くは、源氏物語を読んだことはなくても、それが重要な文学的伝統の一部であることは学校の試験などを通して「知って」いますね。でも、「教養のない人」は、その知識すらない。それが価値の高いものであることを知らない。こういうのを「文化的リテラシー」と呼ぶとしたら、葉書一枚を書くにも、そこには、一定の規範があるというのも、また「文化的リテラシー」です。(車寅次郎が、葉書を書けなくて、書いてもらったり、小学生みたいな書き方をする・・・彼は、そもそも字が下手である—「機能的なリテラシー」もあやしい。)

一つの社会で、一つのリテラシーが、学校教育の目指すものとなり、それを身につけることが教養の度合いに直結する。車寅次郎の持っているリテラシーは、その意味では彼が学校に行っていないことの結果として納得される。リテラシーとは、どのような言語に価値があり(支配的なリテラシーでは当然、書かれた言語—活字—に普遍的な価値がある)、その価値ある言語を受け取ったり生産したりする能力だ、と定義しておきます。

2. 複数形のリテラシー

それでは、一つの社会には、一つのリテラシーしかないのか?

リテラシーという概念を考えようという人たちの中に、リテラシーは常に複数形で考えようという動きがあります。「読み書き能力」という訳語だと、一つの言語に関しては一つの読み書き能力しかないかのような印象を与えます。リテラシーは、しかし上で考えたように、どのような言語に価値があるかという価値観であり、それは文化的な知識と連動していますから、それを単数形で語ることは価値基準が一つだということになります。それで、複数形を使う。

日本語でも読み書き能力という訳語よりもリテラシーというカタカナを使うことがあります。そこには必ずしも単複の意識はないようです。この事情は、英文で「literacy」について語る場合にも、もちろん同じですが。「コンピュータ・リテラシー」とか「メディア・リテラシー」という場合、やはり支配的な一つのリテラシーという感じが強いように思います。まあ、それでも、とりあえず、私もカタカナで「リテラシー」と使うことにします。私は、それを複数で考えることに賛成です。

大きな捉え方をすれば、<どのような言語により価値があるか>というときに、必ずしも「書き言葉／文字」に最高の権威・価値があるとするリテラシーだけが、唯一のリテラシーではないですね。そのことは、後でまた戻ります。

日本の話ですが、学校という制度が普及していく過程の中で、「自分の子供は自分の田んぼで育てる」というような反発があったという話があります。農業社会における子供は、一個の貴重な労働力であり、学校へなど行かせて、役に立たない知識を習うよりも、田んぼで必要な知識は習えるのだ、というような「田舎の人」の「無知蒙昧さ」を言い立てる話の中にも登場します。この「無知蒙昧」な人々は、そもそも読み書き能力が足りない（足りない）わけです。書き言葉というものは、中央集権的な政治体制とともに出現するものですが、学校という制度（義務教育という制度）は、その中央集権的な体制が、工業化、資本主義化するときに出現しました。田んぼの提供する「地域的で周辺のな」知識ではなく、持ち運びができて売れる能力（労働力）に結びついた「普遍的で中心的な」知識、その表現としての書き言葉の知識（価値観）が上位におかれるのが、学校という制度です。

そうすると、田んぼの提供する「地域的で周辺のな」知識は、まるで無駄なものとは思われないけれど、リテラシーの階層の中では、上位には来ない。

ある社会が、一枚岩的であり、その中にいる人々が階層化されていない・・・まあ、そんなことはありえないわけですが・・・場合には、その社会に一つのリテラシーが「必然的に」支配的になるでしょうが、現実には中央集権と言っても、社会は多層であり、瓦状をなし、そこにおける価値観・知識もまた、多層的になる。そこに一つの支配的なリテラシーを作り出すというのは、けっこうな力技なんです。日本国は明治からその力技を、文字通り「力」をもって推進しました。

3. 家庭リテラシーと、学校リテラシー（社会の支配的なリテラシー）

小学校（幼稚園）に入るまでの子供の持っているリテラシーを、家庭リテラシー（Family literacies）と呼ぶことがあります。例えば、家庭が農業をしていて、親や兄弟が赤ちゃんを背負って田んぼに出かけ、少し大きくなると田んぼや野原が遊び場で、もしかしたら親の仕事を手伝ったりしながら、田んぼの周りで世界について知識を身につけ、言葉というのはどのように使うのかを学んでいく子がいます。また、一方に、家庭は都会にあり、親は知的仕事（教師とか公務員とかサラリーマンなど）をしているという家庭では、幼少時に作られる家庭リテラシーは、田んぼとは異なってきます。

田んぼの家庭リテラシーが基本的には無文字だとして（それは偏見ですが）、都会の知的生活者の家庭リテラシーは文字に満ちています。文字だけでなく、言葉というものをどのように生活の中で（人間関係の中で）使用するか、についての価値基準というか考え方も違ってくるかもしれない。

バーンスタインの「制限コードと精密コード」（よく「不足理論」という名前で引かれます）についての論考は、この点で面白いです。彼は、イギリスの公教育で、労働者階級の子弟のドロップアウト率が、ホワイトカラーの家庭の子弟に比べて高いことを説明しようとした。彼の結論は、家庭リテラシーの違い、もっと言えば家庭ディスコース（言葉の遣い方）の違いだ、というものでした。学校で要求されるリテラシー（精密コード）と、ホワイトカラーの家庭リテラシー（精密コード）は非常に距離が近い。しかし、労働者の家庭リテラシー（制限コード）と学校リテラシー（精密コード）とは、距離が遠い、と言うんですね。

労働者の家庭で、子供が夜遅く帰宅すると、親父が「馬鹿野郎、今何時だと思ってるんだ！」と怒鳴って、一発子供をなぐる。子供は「ごめんなさい」と言って、泣いて寝る。同じことがホワイトカラーの家庭で起きたら、お父様が子供に「お前、そこに座りなさい。なぜ遅くなったのか、理由を言ってごらん。」と言う。子供は言葉を使って、自分を説明しなくてはならない立場に追い込まれる。学校の先生と、この「お父様」の叱り方は、大いに共通性が高く、子供は、こういう経験を通して言葉の使い方を学んでいく、というわけです。だから、学校に入って、学校リテラシーにたやすく適応するのはホワイトカラーの子供たちで、労働者の子供たちは適応に困難を感じる。で、ドロップアウトの率が高くなるという説明です。

もう一つ、Shirley Brice Heath という人の、アメリカでの調査を基にした論考「Ways with words」

も引いておきます。ヒースは、労働者階級の黒人家庭、ホワイトカラーの黒人家庭、そしてホワイトカラーの白人家庭（ちょっとろ覚え）における家庭リテラシーの比較をします。バーンスタインとちょっと似ているのですが、例えば「新聞を読む」という行動について、こんなことを報告しています。労働者黒人家庭では、新聞は、一人で無言で読むものではない、というんですね。新聞は、「ちょっと、聞いてよ、また・・・事件があったんだってさ！」という風に、周りの人に読んで聞かせる。で、それを話題にして人が話す（駄弁る）。だから、もし、誰かがむっつりと新聞を広げていたりすると、違和感がある。ホワイトカラー家庭では、簡単に言えばその逆ですね。Ways with words が、社会層によって異なるということを論じた。

家庭リテラシーと、学校リテラシーがく近ければ、子供は学校で成功する確率が高くなる。逆に、距離がく遠ければ、苦勞する。一般的に言って、社会的成功は、自分のリテラシーと、支配的なリテラシーとの距離によって決まり、その距離は、自分の属する集団と支配的な集団との距離でもある、というわけです。

今、リテラシーに関する論考を二つ引きましたが、バーンスタインのものは社会階級による差異で、ヒースのものは、それに加えて民族的（？）な差異でした。過去の黒人研究の中には、黒人も英語を使うけれども、それはアフリカの祖先語であるバンツー語に影響された英語であり、一種のクレオールと考えられるべきであり、それゆえ、黒人の子供たちにとって、アメリカの学校での英語による教育というのは第二言語教育としてケアされるべきだ、と主張したものもあります。違う民族伝統・歴史をもつから、リテラシーが違うのは当然であり、同一のリテラシーの物差しで白人が上、黒人が下というふうに位置づけることは政治的に間違っている、という主張です。

こういう主張は、民族自決とか、少数派の尊重といった政治的アジェンダが無視できなくなると同時に、世界中で出てきます。

台湾原住民の子供たちが、中華民国の学校に入って、教科書で「漢人が（無知蒙昧な）原住民を文明化した」といったことを習うとしまふね。これは、つまり「あなたの祖先たちは、漢人によって文明化された野蛮人だったんですよ」ということを習うということです。「ああ、確かにそうだな。でも、今の私は違うぞ」というふうに、家族の歴史・伝統を一度（漢人の観点から）否定しなければ学校で成功できない。学校へ入る前までに培った家庭リテラシーは、ここで一度否定される。そうだとしたら、その子供たちにとって、学校リテラシーへの適応は、漢人の子供たちにとっての学校リテラシーへの適応よりも時間がかかる困難な仕事だということになりますね。

原住民の子供たちが、「母語」が話せず、母部落に戻ることも比率の上で少ないのは、この「一度否定しなければ学校で成功できない＝社会に出られない」ということが影響していると言う議論があります。（スキャロン夫婦のイヌイットに関する考察一書誌情報を調べる時間がないので失礼します）

このような学校リテラシーは、今、徐々に変化しているわけですが、その理由は「少数派の尊重」（族群融合）ということが台湾国家の政治的なアジェンダに上ったからです。そして、現在、郷土教育が推進されていても、そこではすべての原住民の家庭リテラシーが尊重されるわけではなく、原住民の規範的なリテラシーというものが発明され、郷土教育という課程の中に部分的に取り入れられるだけです。そうすると、実際の課程リテラシーとそのように作られた規範的なリテラシーとの距離の大きさによっても、各家庭の子供たちの学校リテラシーへの適応に差が出てくる可能性があります。

この問題は、カナダ・オーストラリアのアボリジニ、デンマークのアイスランド人などの原住民、アメリカのネイティブ・アメリカンの教育、などなど、主に先住民の近代国家への適応に際して大きな問題として指摘されていますが、それはおそらく「無文字」あるいは「無活字」あるいは「文字・活字があっても出版市場でマイナーな言語」集団に顕著に問題が表れるからだだと思います。それ以外の対立軸

一新興都市住民集団と非工業マニュアル生産の「田舎」住民集団、同じ先住民集団の中の（宗主国）教育を受けたものと、それ以外、同じ都市住民の中の知的労働者とマニュアル労働者、など（網羅的に挙げることで自体が不可能ですが）一をめぐっても、リテラシーの異なり、その階層化を見ることはできると思います。同時に、労働力の移動・移住労働に伴う「家庭リテラシーと学校リテラシーあるいは支配的リテラシーとの距離のばらつき」増加を指摘することもできると思います。

4. 一つのリテラシーを身につけていれば、もう一つはたやすいか？

「一つのリテラシーを身につけていれば、もう一つはたやすい」、つまり、一つのリテラシーの習得が、リテラシー習得一般への基礎となるという考え方は、次のように言い直される必要があると思うのです。

最初に身につけたリテラシーと、目標とするリテラシーの間の距離が近ければ、最初のリテラシーは第二のリテラシー獲得のための基礎となるが、距離が遠ければ困難を引き起こす可能性がある。二つのリテラシーが衝突し、どちらかが否定されなくてはならないとしたら、助けにはならない。

議論の最初に戻りますと、「国語」という国家規範的なリテラシーを身につけることは、「英語」というもう一つの国家規範的なリテラシーを身につけることに役立つ・・・この理屈は、それ自体の内部においては「論理的だ」と思います。私は半分賛成ではなく、全面的に賛成です。

しかし、この言い方そのものが、国家規範的なリテラシーを、言語的な価値の最上部に置く考え方の産物ですから、そうなる私の前面賛成は、全面懐疑に反転します。現社会（価値観）を自己肯定した上に作られるエリート教育の言説にしか見えないわけです。

私としては、ここからパウロ・フレイレの「批判的識字（critical literacy）」の概念へと進めていきたいと考えていますが、その話は別の場所に譲ります。

関連した論考（英文ですいません。日文は不勉強。）

- Ferdman, B.M., Weber, R. and A.G. Ramirez, 1994 *Literacy Across Languages and Cultures* Albany: State University of New York Press CHAPTER 11 (Jim Cummins) 'From Coercive to Collaborative Relations of Power in the Teaching of Literacy'
⇒カミンズ、「差異を生きる個人とコミュニティ」に寄せた論考の元版。
- James Paul Gee 1990 *Social Linguistics and Literacies: Ideology in Discourses* The Falmer Press
⇒複数形で語るリテラシー議論を、起こしたというか理論化した論考です。
- J. Cook-Gumperz (ed.) 1986 *The social construction of literacy* Cambridge University Press
⇒Gee や Ferdman の論考の出発点を作った論考だと思います。
- Weinstein-Shr. G. (1990. August). *Family and intergenerational literacy in multilingual families*. National Clearinghouse on Literacy Education. Q & A Series.
⇒これが family literacy の最初の論考ではないのですが、他に手持ちで「family literacy」関係が（一番上の Ferdman にも一つそういうのが入ってますが）手薄なので、とりあえず挙げておきます。